

 書評

石原健司, 塩田純一 著, 山鳥重, 河村満, 池田学シリーズ 編集
《神経心理学コレクション》

病理から見た神経心理学

岩田 誠

神経心理学に興味を持つ多くの人々に

書評はなぜ存在するのか。答えは明快である。それは、その書評を読んだ人の、その本に対する購入行動の選択に役立てるためである。したがって、書評では結論が重要である。その本を購入すべきか、購入する必要があるか、それをまずはっきりさせることがなければ、書評の存在意義はない。したがって、書評を依頼された評者は、購入すべきという結論に達し得る本の書評だけを引き受けることになるのが普通である。なぜなら、書評を頼まれながら、その本は買うに値せず、という書評を書くというようなことは、まず仁義にもとるという点からも、あり得べからざることなのである。すなわち、私が本書の書評を書くことを引き受けたということは、この本が、1人でも多くの方によって購入され、読まれ、そしてさまざまな議論を巻き起こす源になってほしいと思うからである。

近代医学を支えてきた基盤は科学的な思考であり、その中心にあるのは、論理性、客観性、普遍性という三原則である。この三原則が十分に満たされていないものは、偽科学として退けられ、これらを満たすもののみが、科学的真理として受け入れられる。そして、医学の分野においては、18世紀以来、この三原則を保障する原理の基となってきたのが、病理解剖学であった。欧米の病理解剖室には“hic locus est ubi mors gaudet vitae succurrere”という言葉が掲げられているが、その意は“ここは、死者が生者を教える場である”であり、病理解剖学で得られた最終的な所見なしには、生前のいかなる解釈も無意味であるということを教えるものである。本書は、病理解剖室でのこの教えを、大脳皮質の変性性疾患において実践したという意味で、きわめて貴重なドキュメントであるだけでなく、そのような方法論をいかにして個々

の症例に適用していくかを考えるうえでも、大きな意義を持つ書物である。

これまでの神経心理学研究において研究対象とされてきたのは、脳血管障害、脳外傷、脳炎、脳腫瘍など、脳の一定の部位がすべて破壊されつくしてしまうような病変であった。神経心理学の基礎概念である大脳皮質の機能局在の原則は、これらの局所破壊性病変によって築かれてきたものである。これに対し、本書において研究対象とされたものは、すべて変性性大脳皮質病変を生じる疾患であり、一定の部位の脳組織がごっそりなくなってしまうというような、局所破壊性病変とは全く異なった病態である。そこには、同じ領域に存在しているとはいえ、異なった種類の神経細胞が、あるものは侵され、あるものは侵されずに残る、という選択的変性過程が表現されているはずである。

本書に記載されているような変性疾患の臨床・病理対応研究において、筆者のようなものが期待するのは、局所破壊性病変によって築かれてきた神経心理学の常識的な考え方にに対し、変性性デメンチアの原因疾患の病理学的検査が、機能局在の原則に対してどのような影響を与えたか、ということである。その意味では、本書における臨床症状と病理所見との対比研究には、評者としてはいまだ満たされない大きな疑問が残っている。そのような、いまだ論じられていない数多くの重要なことを示してくれた本書は、神経心理学に興味を持つ多くの人々に、ぜひ読んでいただきたい書物であると思うのである。

(東京女子医科大学神経内科学名誉教授/メディカルクリニック柿の木坂院長)

●A5 248頁 2011 定価 3,990円(本体 3,800円+税) 医学書院